

QOL/PRO 研究会第 1 回学術集会報告

世話人 齋藤信也(岡山大学)



第 1 回 QOL/PRO 研究会学術集会が、2013 年 12 月 23 日(祝日)、京都市の京都府立総合社会福祉会館で開催されました。

まず、本会世話人代表である立命館大学教授下妻晃二郎先生から、開会の挨拶ならびに基調講演が行われました。QOL/PRO 研究会の発足から、今回の第 1 回学術集会開催までの本会の歩みについて紹介があると共に、この分野の国際的な研究の潮流についても解説がありました。またお話の中で、「患者の『主観的な訴え』を適切に評価し、その結果を医療現場や政策に還元していく」ことの必要性を強調されました。



引き続き行われた一般演題発表では、計 6 題のご発表があり、フロアとの間で熱心な質疑応答がなされました。特に今回、質問時間に 10 分を割いたことから中身の濃いディスカッションが可能となりました。以下にその内容を簡単に紹介します。

まずは、長崎県立大学の林田りか先生から、「幼児の QOL 調査票の開発に関する研究」についての発表がありました。QOL 評価は難しいとされる 5 歳以下の幼児に対してオリジナルの絵カード方式による評価を行い、5 歳以上の子供では、信頼性・妥当性のある調査票であることを明らかにされました。幼児の発達との関係から月齢も加味した研究の必要性が示唆されましたが、フロアからも小児疾患患者の QOL 評価への応用可能性について質問がなされるなど、多くの聴衆の興味を引く内容でありました。



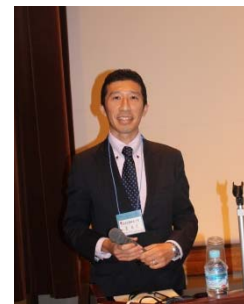
次に、がん研究会有明病院の本多通孝先生から、「Gastrointestinal Symptom Rating Scale(GSRS)は胃癌・食道癌術後の QOL を評価できるか」と題して、もともとは消化性潰瘍患者の QOL 評価票として開発された GSRS が胃癌・食道癌患者の術後 QOL 評価にも使えるかどうかを調査した多施設共同研究の結果の一部が報告されました。結論としては GSRS は胃癌・食道癌術後患者に対しては計量心理学的妥当性を示すことができず、その利用には注意が必要とのことでありました。演者からは、今後胃癌・食道癌術後の QOL 評価のためには、QOL 評価部分と症状評価の部分に分けた評価票が求められるとの示唆がありましたが、これに対してフロアから現状の包括的な QOL 評価票でも、項目 1 つ 1 つを症状と捉え、それを症状の PRO と考えて、回答分布を重症度として判定する方法も可能であるとのアドバイスがありました。





次に、沖井クリニックの沖井明先生から、「慢性期脳卒中片麻痺患者の痙縮治療を契機に変容する障害体験モデルの研究計画」の発表がありました。慢性期脳卒中片麻痺患者の初回ボツリヌス治療（神経筋接合部をブロックするボツリヌス毒素による筋麻痺作用を利用）体験をモデル化し、治療前後の活動や参加の変化に関連する要因を探求する研究計画が詳細に報告されました。特に数少ない症例を詳細に検討する中で、質的研究と量的研究を混合する研究法についての紹介や、質的研究の手法としての「複線経路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model; TEM)」の紹介があり、聴衆に裨益するところが大きな発表でした。

次に、新潟医療福祉大学の泉良太先生から、「項目反応理論を用いた脳卒中患者における EQ-5D-3L と EQ-5D-5L の比較」に関する発表がありました。効用値(この用語の使用についても議論があるところですが)の間接測定法である EQ-5D-3L と EQ-5D-5L の測定特性を、項目反応理論 (Item Response Theory; IRT) を用いて検討した報告ではありますが、対象者が 526 名に上る規模の大きな調査であり、興味深い結果が報告されました。EQ-5D-5L の方が、EQ-5D-3L よりも識別力が高い一方、移動の程度の項目では困難度が異なる偏りを示しましたが、これは文章表現に起因していることが示唆されました。会場からは、代理回答によることがそうした違いに影響を与えているのではないかと質問がなされるなど、PRO データの取り方(代理(プロキシ)の扱い方)等、この分野の研究の根幹をなすような大切なディスカッションが行われました。



次に、立命館大学・大学院生の中村和裕君から、「乳癌術後患者の QOL におけるレスポンスシフト (RS) の分析」の報告がありました。レスポンスシフト (Response Shift; RS) はこの研究会の主要な研究テーマであり、その RS を Oort が提唱した「Structural Equation Modeling : 構造方程式モデリング」という方法を用いて解析したことに対して、多くの聴衆から関心が寄せられました。RS をバイアスとしてのみ扱うのではなく、心理的適応としてポジティブに評価する視点の重要性も指摘されました。

最後に、同じく立命館大学・大学院生の柴原秀俊君から、「ドセタキセル再燃後の去勢抵抗性前立腺癌に対するアピラテロンの費用対効果分析」と称して、医薬品の医療経済評価に関する発表がありました。それまでの 5 題と異なり、主目的はモデルを用いた新しい薬の費用対効果(効用)分析ですが、効用値(QOL 値)の応用と言うことで、興味深い内容でした。もともとわが国には使用可能な効用値のデータがほとんどなく、そうした場合に質の高い外国



人の QOL データを用いるのか、それとも日本人から得た効用値が望ましいのかに関してホットな議論が展開されました。



一般演題に引き続いて、東北大学の鈴嶋よしみ先生（本会世話人）が、「QOL/PRO 評価 課題への挑戦 – 2つの視点から比較可能性を考える–」というタイトルで特別講演を行いました。なおこの特別講演に関しましては、鈴嶋先生の恩師であり、わが国における QOL 研究のリーダーの一人である京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻医療疫学分野教授の福原俊一先生が座長の労をお取りくださいました。福原先生からは、鈴嶋先生の研究者としてのご経歴の紹介に加えて、鈴嶋先生との共同研究の成果のエッセンスを手際よくご紹介くださり、改めてこの分野の研究の魅力を再認識させていただきました。

鈴嶋先生からは、第 1 に異なる文化圏での QOL/PRO 評価の比較可能性について、第 2 にレスポンスシフトに関する比較可能性について、わかりやすいご講演がありました。前者に関しては、SF-36 の概念枠組みが欧米とアジアでは一見異なるように見えたが、従来の two components モデル（身体的および心理的側面）を three components モデル（前 2 者に加えて社会的役割的側面）にすると、そのフレームワークの共通性の方が優位になったとのことでした。次にレスポンスシフトに関するわかりやすい概説があり、それに引き続いて、それを個々に尋ねる方法としての then test、およびデータに尋ねる方法としての Structural Equation Modeling：構造方程式モデリング（SEM）の紹介がありました。一般演題第 5 席の中村君の発表とあわせて、参加者の理解の助けになる内容でした。



鈴嶋先生は福原先生と共にわが国の QOL 研究を牽引してこられた方であり、そのご研究の成果の一端に接することができた意義深い特別講演でした。講演終了後も、多くの聴衆の皆さまが鈴嶋先生のところに集まり、熱心な議論をされていたことが印象的でした。

約 3 年前に産声を上げたばかりの QOL/PRO 研究会が、今回初めての学術集会を開催できたことは感慨深いものがあります。これもひとえにご参加くださった皆さまの熱意の賜だと存じます。今後とも本研究会の活動に加わり、支えていただけますことをお願いして、学会報告といたします。

